様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０７１２

研究課題名（和文）大学における「翻訳通訳リテラシー」教育のコンテンツおよびデリバリー方法の研究

研究課題名（英文）A study on the contents and delivery methods of "translation and interpreting literacy" education at universities

研究代表者
武田　珂代子（TAKEDA, Kayoko）

立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授

研究者番号：６０６２５８０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：翻訳通訳についての適切な理解や対応ができる能力として「翻訳通訳リテラシー」という概念を提起し、その教育におけるコンテンツとデリバリー方法について研究した。具体的には、翻訳通訳リテラシー科目を日本語と英語で開発、展開するとともに、翻訳テクノロジーに関するリテラシーのオンライン講座を立ち上げた。その実施状況に基づき、翻訳通訳リテラシー教育の基本アプローチ、構成要素、デリバリー方法の具体的提案を行った。研究成果は、論文や書籍、地域社会や国内外の学会での発表を通して発信した。さらに、立教大学で28年度に開始した「サービスラーニングとしてのコミュニティー翻訳通訳」プログラムに本研究の成果を反映させた。

研究成果の概要（英文）：This study introduced the concept of "translation and interpreting (TI) literacy," and proposed contents and deliver methods for TI literacy education. Specifically, we developed TI literacy-related courses in Japanese and English for university undergraduate students, and an open-access online course on translation technology literacy. Based on the experiences and student feedback gained through these courses, we proposed basic approaches, essential elements, and deliver methods of TI literacy education in more specific manners. We published our research findings in journal articles and a book chapter. We also presented them at gatherings in industry and local communities, and at academic conferences in Japan and overseas. Further, the findings and experiences of this study were drawn on in the development of a service-learning program, called "Community TI as Service Learning" at Rikkyo University, which started in 2016.

研究分野：翻訳通訳研究

キーワード：翻訳通訳リテラシー　翻訳教育　通訳教育　翻訳テクノロジー　オンライン講座　ユーザー教育　文理・産学連携　サービスラーニング

１．研究開始当初の背景

テクノロジーの進展を背景とした翻訳環境の現状に照らした新たな翻訳者養成法の研究に取り組む中で、大学院での翻訳者養成が定着していない日本では、翻訳実践の諸相や体系的翻訳教育に対する理解を醸成する裾野的教育も検討する必要があるとまず認識した。それと同時に、同様の研究を通訳分野にも拡張したいと考えた。

また、当時、政治家発言の国際報道や東京都のオリンピック招致活動を通して、国際社会に向けた正確で効果的な情報発信を支える翻訳通訳能力の重要性や、多言語地域社会における緊急時支援、その他公共サービスでの翻訳通訳ニーズを意識した翻訳通訳教育の必要性を再認識した。

そこで、翻訳通訳実践に対する適切な理解や対応能力（翻訳ツールや通訳者の適材適所的使用、翻訳者・通訳者の職務倫理や専門性に対する理解など）を涵養する「翻訳通訳リテラシー」教育という新たな概念の提案を検討したいと考えた。また、「翻訳通訳リテラシー」教育におけるコンテンツとそのデリバリー方法を具体的に提案することによって、上記のようなニーズや課題への対応に貢献したいと考えるに至った。

２．研究の目的

本研究は「翻訳通訳リテラシー」（翻訳通訳について適切な理解や対応ができる能力）という概念を検討し、「翻訳通訳リテラシー」を涵養する教育における基本的なアプローチ、コンテンツ、およびデリバリー方法を研究し、「翻訳通訳リテラシー」教育の基盤を提案することを目的とした。

「翻訳通訳リテラシー」教育の大目標として、日本の国際的な情報発信力強化と地域社会の言語ニーズへの対応に貢献できることを目指しながら、具体的には以下の 2 点を目的とした。

（１）「翻訳通訳リテラシー」という新しい概念を検討し、その涵養を目指す大学・学部生向け科目やオンラインコースなどを開発、実施する。

（２）「翻訳通訳リテラシー」関連科目やオンラインコースの実施を通して、「翻訳通訳リテラシー」教育における基本的なアプローチ、コンテンツの構成要素、デリバリー方法などを包括的に提案する。

３．研究の方法

本研究では、主に三つの方法で、取り組みを進めた。その中で、自然言語処理分野の研究者や翻訳産業界との対話を進め、多角的な視点で研究を行った。

（１）　文献研究

主に、学部生向けの翻訳通訳教育、翻訳通訳サービスのユーザー教育、オンライン教育などに関する先行文献を批判的に検討する。

（２）「翻訳通訳リテラシー」関連科目の開発と展開

上記の検討結果を参照しながら、「翻訳リテラシー」関連科目を日本語と英語、またオンライン形式も含めて、開発し、実施する。実施にあたっては、学生と講師からのフィードバックを収集し、検討する。

（３）「翻訳通訳リテラシー」教育のコンテンツおよびデリバリー方法の検討と提案

上記で収集したフィードバックなどをもとに、「翻訳通訳リテラシー」教育の基本的アプローチ、コンテンツ、デリバリー方法などについて検討し、提案する。

４．研究成果

（１）「翻訳通訳リテラシー」の定義づけ

「メディアリテラシー」や「医療リテラシー」の事例にならい、「翻訳通訳リテラシー」を「翻訳通訳の諸相を理解し対応できる基礎能力」と定義した。通信技術が急速に進展したグローバル社会で異言語・異文化間のやりとりが日常的に発生している中、翻訳通訳を介した情報の受容と発信の本質や仕組みを学び、またツールの評価・活用能力を備えることは、個人の知見や可能性の発展につながると判断した。

（２）「翻訳通訳リテラシー」教育の目的の見極め

翻訳通訳の実践や翻訳者・通訳者に関する包括的な知識や対応能力を涵養することにより、以下のような学生を育成することを「翻訳通訳リテラシー」教育の目的と定めた。

① 翻訳通訳サービスやツールの効果的な利用者
② 専門職としての翻訳者・通訳者の重要性に対する理解者
③ 翻訳通訳の専門訓練や研究に進む候補者

（３）「翻訳通訳リテラシー」教育の意義の見極め

翻訳通訳行為の諸相に関する包括的な理解を形成し、翻訳通訳の専門職訓練や研究の土台を提供する「翻訳通訳リテラシー」教育には以下のような意義があると定めた。

① 翻訳者・通訳者に要求される特別なスキルと知識、機械翻訳の利点と限界などに対する理解を促進することで、翻訳通訳サービスとツールに関する誤解と誤用の削減に対し、ボトムアップ的な貢献ができる。
② 翻訳者・通訳者の社会的役割についての議論を通して、グローバル化された経済や文化、多文化共生社会、国際政治などにおける今日的課題に関する気づきが促される。

③　翻訳通訳の高度な専門性が認識されることで、諸外国で行われているような大学院での翻訳者・通訳者養成の必要性が日本でも認知され、本格的な実施が根付くことに貢献できる。

（４）「翻訳通訳リテラシー」関連科目の開発と展開

「翻訳通訳リテラシー」を涵養する学部生向け一般科目やオンライン講座を開発し、学生や講師のフィードバックをもとにコンテンツやデリバリー方法の精査を続け、安定的な展開に到達した。具体的には主に以下のものを実施した。

①　「翻訳・通訳と現代社会」（立教大学）

2013 年度から立教大学の全学部生を対象とした一般選択科目として提供している。今日のグローバル社会におけるさまざまな場面で翻訳と通訳が果たす役割について学生の理解を深めることを目的とする。特に、ユーザー教育の側面に傾注した。

医療、司法、福祉、ビジネス、映画、文芸から産業までさまざまな分野における翻訳者・通訳者、研究者、開発者、組織の翻訳通訳コーディネーターなどをゲストスピーカーとして招き、現代社会における翻訳通訳の具体的な実践例を多角的な視点から考える機会を提供している。

現在、100 名以上の学生が履修している。これまでのフィードバックを分析すると、翻訳通訳の実践について基礎知識を得ることができ、自分のキャリア形成の参考になったという学生の声が確認できた。また、現代社会のさまざまな場面で翻訳通訳ニーズが起こる背景とその重要性に気づき、「移民」「医療」「福祉」などの政策についても考える機会となったことが確認できた。

②　「翻訳テクノロジーを学ぶ」（オンライン教材）

2015 年９月に一般公開したオンライン教材。グーグル翻訳などを学生が頻繁に利用している状況を鑑み、翻訳テクノロジーの仕組みおよび長所と短所に対する適切な理解の推進を目的とした。翻訳通訳の実践に関する基本的な知識の涵養や翻訳通訳サービスのユーザーに対する啓蒙も目指している。

機械翻訳、ポストエディティング、翻訳メモリーなどを扱い、ツールの仕組みだけでなく、テクノロジーの発展で翻訳者の役割が変化しつつある状況についても検討を促す内容になっている。

通常の授業時間内では十分に扱えない内容を自分のペースで学び、大学内外の誰もがアクセスできるようにした。オンライン形式を用いることで、翻訳教育分野における適格な教師の不足という問題への対処や、学生の利用状況をメタデータとして収集できる点、さらに、目まぐるしく発展や変化をとげるテクノロジーに関し、教材のアップデートがしやすいという強みがある。

③　英語での「翻訳通訳リテラシー」科目

立教大学で英語上級クラスの一部として、翻訳通訳リテラシー関連の科目を 2013 年度から実施している。内容は毎年変わり、翻訳通訳の実践を全般的に扱うものから、時事問題、政治外交、歴史、戦争における翻訳通訳、視聴覚翻訳（字幕、吹き替えなど）に焦点を当てたものまである。

（５）「翻訳通訳リテラシー」教育の具体的な提案

上記の「翻訳通訳リテラシー」科目の実施状況に照らして、「翻訳通訳リテラシー」教育における基本的アプローチ、内容、デリバリー方法について以下のような包括的な提案をした。

①　基本的アプローチ

翻訳通訳の専門教育に関して論じられてきたプロセス志向の教授法（ジル、2009/2012)、社会構成主義的アプローチ(Kiraly, 2000)、また教材や手続きの現実性（Sawyer, 2004）などを、「翻訳通訳リテラシー」教育でも追及することが望まれる。

まず、翻訳通訳事象を事実の羅列のように学ぶのではなく、そうした事象がなぜ生じたのか、背景や作用要因、また課題の見極めとその解決法の検討を学生に促すべきである。

次に、教師が履修者に一方的に知見を伝達するのではなく、履修者自らが教師や他の履修者との対話や体験などを通して知識と理解を自ら構築していくことが重要だ。

さらに、扱う内容が身の回りで起きていることやメディアで報道されていることであったり、翻訳通訳の現場を観察したりするなど、現実世界との直接的な接触を重視すべきである。それにより、履修者による知識の内在化、また、社会的、政治的、文化的コンテクストへの注意、さらに、専門教育に対する動機づけが促される。

②　コンテンツ（構成要素）

「翻訳通訳リテラシー」教育のコンテンツとして含まれるべき項目として、以下を提案する。

- 翻訳通訳研究で用いられる基本的なメタ言語の説明
- 翻訳通訳事象の多様性
- 翻訳通訳が生じるコンテクスト
- 職業としての翻訳通訳に関心を持つ学生のための基本的なガイダンス
- 機械翻訳などテクノロジーの仕組み、長所と注意すべき点
- 翻訳通訳の初歩的実習
- ロールプレイなどを通した翻訳通訳のユーザー体験
- 蓄積した知識を整理するツールとしての基本的な理論的枠組み

③　デリバリー方法

「翻訳通訳リテラシー」科目を効果的に実施するためには以下の事項を考慮するよう提案する。

- 人数：活発なディスカッションや翻訳通訳の実習を効果的に行うためには履修者数を適切なレベルに限定するのが望ましい。
- 設備：翻訳と編集の実技、翻訳ツールの実験的使用を可能にするコンピューターなどの設備が必要。
- 場所：教室内だけでなく、実際の翻訳通訳現場へフィールドトリップなども取り入れるのが望ましい。
- フィードバック：履修者のフィードバックに注意を向ける内省的教授用を通して、授業の継続的改善に取り組むべき。
- 課題：リーディングだけでなく、翻訳通訳現場の観察や、初歩的な翻訳などを取り入れるべき。

（６）今後の取り組みにつながった成果

本研究を通して、今後、文理・産学を超えた翻訳通訳研究を進展させるベースができただけでなく、学生の主体的な参加を促す翻訳通訳サービスラーニングの開発につながった。

① 文理・産学を超えた研究協力

本研究を通して、特に翻訳テクノロジー関連で、自然言語処理分野の研究者と交流が生まれ、共同でワークショップ、学会発表、論文執筆などをしたことで、今後の共同研究プロジェクトの可能性につながった。

また、翻訳産業界とも連携し、意見の交換、本研究の成果の共有を講演会、ワークショップ、業界紙への寄稿などを通して行ったことで、現場の状況を意識し続ける研究につながった。さらに、地方自治体など地域社会でも、本研究の成果を共有できたことは有意義だった。

② 翻訳通訳のサービスラーニング

本研究の成果、特に翻訳通訳実践に対する学生の関心が高まったことに対応する意味で、立教大学内の翻訳通訳ニーズに翻訳通訳科目を履修する学生が対応するという、サービスラーニングのプログラムを開発し、実施中である。「ラーニング」の側面に力を入れ、トレーニングや振り返りを包含するプロジェクトの実施をするためのガイドラインを作成した。

＜引用文献＞

① ジル・D. 通訳翻訳訓練：基本的概念とモデル、2009/2011、みすず書房
② Kiraly, D., A Social Constructivist Approach to Translator Education, 2000, St. Jerome
③ Sawyer, D., Fundamental aspects of Interpreter Education, 2004, John Benjamins

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① 山田優、藤田篤、影浦峡、「文理・産学を超えた翻訳関連研究」開催報告、AAMT ジャーナル、査読無、63 巻、2016、36-40
② 山田優、立見みどり、武田珂代子、「翻訳テクノロジーを学ぶ」：教材オンライン化の現状と展望、言語処理学会年次大会発表論文集、査読有、23 巻、2016、953-956
③ Carl, M., Lacruz, I., Yamada, M. & Aizawa, A., Measuring the Translation Process, 言語処理学会年次大会発表論文集、査読有、23 巻、2016、957-960
④ 山田優、外国語教育における「翻訳」の再考、関西大学外国語学部紀要、査読無、13 巻、2015、107-128
⑤ 武田珂代子、山田優、辛島デイヴィッド「翻訳通訳リテラシー教育」の提案に向けて、通訳翻訳研究、査読有、14 巻、2014、1-14
⑥ Takeda, K., The interpreter as traitor: Multilingualism in Guizei lai le, Linguistica Angverpiensia, 査読有, No. 13, 2014, 93-111
⑦ Takeda, K., The role of Nisei linguists during World War II and the Allied Occupation of Japan, 翻訳学研究集刊, 査読有, No. 17, 2014, 161-174
⑧ Yamada, M., Can college students be post-editors? An investing into employing language learners in machine translation plus post-editing settings, Machine Translation, 査読有, No. 14, 2014, 49-67

〔学会発表〕（計 30 件）

① 武田珂代子, Trends in Historical Studies of Interpreting, 2016 International Conference on Translation and Interpreting Studies, 2016/11/5, 文藻外語大学（台湾）
② 武田珂代子, Beyond the MIS: Other stories of Nisei linguists, AAS 2017, 2017/3/17, トロント（カナダ）
③ 山田優,Collaborative audiovisual translation in a Japanese classroom, ATISA Conference 2016, 2016/4/2, モントレー（米国）
④ 山田優,Fansub in a Japanese university classroom; The emergence of translation norms through collaborative subtitiling, Second East Asian Translation Studies Confernece, 2016/7/9, 明治大学（東京都・千代田区）
⑤ 武田珂代子, 通訳の社会学的モデル再考、日本通訳翻訳学会第 16 回年次大会プレコンファレンス、2015/9/11、立教

大学（東京都・豊島区）
⑥ 山田優、立見みどり、翻訳テクノロジー教育のｅラーニング化の提案、日本通訳翻訳学会第 16 回年次大会、2015/9/12、青山学院大学（東京都・渋谷区）
⑦ 武田珂代子，Introducing TI literacy education，Monterey FORUM 2015，2015/3/28，モントレー（米国）
⑧ 武田珂代子、山田優、辛島デイヴィッド、学部生向け翻訳通訳リテラシー教育の確立に向けて、日本通訳翻訳学会第 15 回年次大会、2014/9/13、愛知学院大学（愛知県・名古屋市）

〔図書〕（計　6　件）
① 武田 珂代子、山田 優 他、晃洋書房、翻訳通訳研究の新地平、2017、234 (i-xii，50-76，108-162，190-217)
② Takeda，K.，Baigorri，J. Routledge，et al.，John Benjamins，New Insight in the History of Interpreting，2016，278 (XII-XVI，225-246)
③ Pöchhacker，F.，Takeda，K. et al.，Routledge，The Routledge Encyclopedia of Interpreting Studies，2015，582 (216-217，423-424)
④ Mikkelson，H，Jourdenais，R.，Russell，D.，Takeda，K.，et al.，Routledge，The Routledge Handbook of Interpreting，2015，456 (96-111)
⑤ Fernandez-Ocampo，A.，Wolf，M.，Takeda，K. et al.，Framing the Interpreter: Toward a Visual Perspective，2014，203 (150-159)
⑥ Chen，L.，King，K.，Wagner，A.，Takeda，K.，Sekine，Y. et al.，Ashgate，The Ashgate Handbook of Legal Tranlation，2014，325 (223-236)

〔その他〕
ホームページ等
翻訳通訳教育ポータル
http://www2.rikkyo.ac.jp/web/tiedu/index.html
翻訳テクノロジーを学ぶ
http://www.apple-eye.com/ttedu/kougi.html
立教コミュニティー翻訳通訳
http://www2.rikkyo.ac.jp/web/ricolas/

６．研究組織
(1)研究代表者
武田　珂代子（TAKEDA，Kayoko）
立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授
研究者番号：60625804

(2)研究分担者
山田　優　（YAMADA，Masaru）
関西大学・外国語学部・准教授
研究者番号： 70645001

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
影浦　峡（KAGEURA，Kyo）
オヘイガン　統子　（O’HAGAN，Minako）
楊　承淑（YANG，Cheng Shu）
ラッセル秀子（RUSSELL，Hideko）